

山藥ノ實ナリ、葉間ニ生ズ、花ハ別ニ穂ヲナシ生ズ、土芋ノ穂ニ同ジ、ムカゴハ大サ四五分、大小一ナラズ、形ノ圓長モ等シカラズ、褐色ニシテ斑アリ、食用ニ良トス、

〔空穂物語 藤原の君〕かくて人まいりなどするを、とくまちいちへ出たるまに、さむらひに人まいりて、ひるましり侍に、さるな、しとて、うへに申ければ、おとこ心まどひて、われか人かにもあらでの給か、ればこそは、人なくて年ごろへつれ、いかなるついえ有らん、ましてあたらしくとも人は、十五人つけ、まめをひとさやあてに、いだすとも、とをまりいつ、なり、たねなくしていくそばくなりぬる、こをひとつあてに、いだすとも、とをまりいつ、なりならしてとらば、おほくのぬかごいも出きぬべし、

〔源平盛衰記 二十六〕忠盛歸入事

此子清盛三歳ノ時、保安元年ノ秋、白川院熊野御參詣アリ、忠盛北面ニテ供奉セリ、絲鹿山ヲ越給ヒケルニ、道ノ傍ニ薯蕷絃枝ニ懸リ、零餘子玉ヲ連テ生下、イト面白ク觀覽アリケレバ、忠盛ヲ召テ、アノ枝折テ進セヨト仰ス、忠盛零餘子ノ枝ヲ折進スルトテ、仰下シ給ヒシ女房、平産シテ男子也、オノコバナラバ、汝ガ子トセヨト、勅定ヲ蒙リキ、年ヲ經ヌレバ、若思召忘タル御事モヤ、次ヲ以テ驚奏セント思ヒテ、一句ノ連歌ヲ仕ル、

這程ニイモガヌカ子モナリニケリ、是ヲ捧タリ、白川院打ウナヅガセ御座ジテ、

忠盛トリテヤシナヒニセヨト付サセ御座ケリ、思召忘サセ給ハヌニコソト、悦思ヒケル處ニ、還御ノ後三歳ト申冬冠給テ、熊野權現ノ御託宣ナレバトテ、清盛ト名ク、

〔今物語〕小大進と聞えし歌よみ、略中ほどなく八幡の別當光清に相ぐして、たのしく成にけり、子などいできて後、もろともに居たりける所、近き所にいものつるのはひか、りて、ぬかごなどのなりたりけるを見て、光清、